



ごあいさつ

日本藻類学会会長 堀 輝三

一昨年、偶然に外国の自然史博物館で、307年ほど前、すなわち17世紀末につくられた日本の海藻の乾燥標本に出会いました。1690から92年までの2年間、長崎の出島に滞在したKaempferのつくったものでした。和紙にはられた当時の日本のシダ、種子植物の錯葉標本が1冊の本としてまとめられて収蔵されており、その92頁に海藻の標本があったのです。その時、私は「もしこの標本からDNAを取り出すことが許されるなら、現生の種と・・・、貴重なデータが得られる・・・」と、つい考えてしまいました。1枚の標本でも、それがつくられた時代には考えられもしなかった大変なことを300年後に語れる、夢のような資料となることを想像すると、その重さに思わず溜息が出たことを覚えています。現在に目が眩むあまり、われわれはともすると過去の所産をないがしろにするきらいがあることは否めません。しかし、重要な財産を受け継ぐ度量があるのは本学会の誇るべき宝だとも思います。

日本の藻に関する学は本草に始まり、自然科学としての道は明治以後、海藻学として歩み始めました。わが藻類学会は1952(昭和27)年に創立され、以来34代の会長のもと47年の歴史が刻まれてきました。この間、本学会は会員の努力はもとより、賛助会員、出版社等の御協力と理解を得て支えられてきました。そのことに対し深く感謝いたすとともに、今後も変わらぬ御支援、御鞭撻をお願いいたします。

毎年開催される定例学会での研究発表を通覧しますと、その内容の変遷の著しいことに驚きます。これは、この半世紀の間に、藻の基礎研究、応用研究、そして研究技法の飛躍的な進歩と展開があったことによります。今は、藻だけの研究が主たる眼目であった頃とは変わり、自分が直接的に扱うことはなくても、ウイルス、細菌、原生動物、菌類、そして高等植物との関係を視野に入れた研究・論議の展開が必要な状況になりつつあります。したがって、そう遠くない将来に、こ

れまでの藻類学という暗黙の守備範囲の垣根が取り払われる可能性すらあるといえるかもしれません。

だからといって、藻の占める意義が失われるわけではありません。地球上で果たす藻の役割の重要性、人間社会にとっての重要性がますます認識されるでしょうし、そのためにわれわれ一人一人も応分の努力を必要とします。

本学会は藻類に関する総合学会としての役割をはたす時期にきていると思います。本学会の現在及び将来の活動を考えますと、研究発表の大会はもとより、学会が主・共催するシンポジウム、啓蒙・教育活動、技術講習会、勉強会などの諸活動の重要性が一層増すと考えられます。したがって、本学会は会員皆様の理解と協力を得て、これらを積極的に展開したいと考えます。

大会期間中に催される懇親会は、学会が未だ小規模であった頃は会員相互の家族的な親睦であったわけですが、現在はいろいろな分野の、いろいろな世代の参加者が、かみしも脱いで忌憚なく話すことのできる絶好の機会を提供していることとなります。相互の情報交換をはじめとして、共同研究の話し合い、世界の藻類学の情勢を知る機会にもなります。多くの会員が、この機会を十分に活用されることを望みます。

私は今世紀最後を締めくくる会長の役を仰せつかり、諸幹事、評議員、会誌編集委員長及び編集委員一同とともに、学会と藻類学発展のために鋭意努力するつもりです。二十世紀から二十一世紀への節目の時期の学会執行部として、現在の日本の藻類学会会員の英知を集め、次代の藻類研究・教育の発展の礎となり、かつ会員全員に有意義な企画の実現を模索中です。会員の皆様の中に、もしこれはというアイデアがありましたら私にお寄せ下さい。

平成11年1月